

朝鮮三国時代の金銅仏像に関する調査

赤羽奈津子

(龍谷大学アジア仏教文化研究センターリサーチアシスタント)

目次

1. 調査の概要
2. 調査の内容
3. 調査を終えての所感

【キーワード】 韓国仏教 朝鮮三国時代 金銅仏 仏教造像銘 漢城百済

1. 調査の概要

出張日程：2014年11月15日～18日（3泊4日）

調査者：赤羽奈津子（BARC リサーチアシスタント）

出張目的：韓国ソウル特別市内の博物館・美術館が所蔵する、朝鮮三国時代の金銅仏像及びその他金石史料の調査とソウル特別市内の寺院の見学

訪問地：韓国国立中央博物館・サムスン美術館リウム・漢城百済博物館・曹溪寺（仏教中央博物館）・奉恩寺・夢村土城址・高句麗鍛冶屋村（峨嵋山一帯高句麗堡塁群）・ソウル芳夷洞百済古墳群

2. 調査の内容

近年、大韓民国ソウル特別市では再開発に伴って様々な遺跡・遺物が発見され、新たな博物館や歴史公園などが次々と作られている。本出張の目的はソウル市内の博物館等を見学して朝鮮三国時代の金銅仏像及びその銘文の調査を行うこと、そして百済関連史跡の見学を行うことである。

11月15日、関西国際空港から出国し仁川国際空港に到着、ホテルに荷物を置いた後に韓国国立中央博物館に向かった。「高句麗 延嘉七年銘 金銅仏光背【写真1】」などの銘文の調査を行う予定であったが、現在は複製品しか展示されておらず、現物を確認することはできなかった。他にも「百済 砂宅智積造堂碑【写真2】」の複製品なども展示されていた。いずれも実物ではないものの、実寸を確認できた点は収穫であった。また、「広隆寺 弥勒半跏思惟像」との類似点が指摘される、韓国国宝第83号の「金銅弥勒菩薩半跏思惟像【写真3】」をはじめ、三国時代以降の無銘金銅仏像【写真4】の他、屋外に展示されていた統一新羅時代以降の仏塔なども見学した。とりわけ、統一新羅の景德王17年（758）に慶尚北道金泉の葛項寺に建立された東西三層石塔については、事前に浮彫像の痕跡がある可能性に関する話を伺っており、鋳を打っていたと考えられる小孔などを確認した【写真5】。



【写真1】高句麗 延嘉七年銘 金銅仏光背（複製）



【写真 2】百済 砂宅智積造堂碑(複製)



【写真 3】金銅弥勒菩薩半跏思惟像



【写真 4】高句麗 金銅菩薩立像



【写真 5】葛項寺東塔

11月16日は、まず曹溪寺【写真 6】と付属する仏教中央博物館【写真 7】を見学した。曹溪寺では朝早くから勤行が行われており、大雄殿の中では多くの人が熱心に祈りを捧げていた。本堂に隣接する極楽殿や、新設された観音殿の中にも多くの人が集まって礼拝・読経しており、韓国の人々の深い信仰心が感じられた。

曹溪寺に隣接する仏教中央博物館は、2007年に開館した仏教を主要テーマとする博物館である。事前に確認したところ入場料が必要だということだったが、実際に行ってみると

無料で見学することができた。常設展示室では曹溪寺所蔵の仏典・仏像や、曹溪寺のあゆみについてパネル展示がなされており、曹溪宗・曹溪寺の歴史について理解を深めることができる【写真8】。また、特別展示室では奉恩寺の板殿に関する展示が行われていた。



【写真6】曹溪寺



【写真7】仏教中央博物館



【写真8】仏教中央博物館 内部



【写真9】サムスン美術館リウム

次に、サムスン美術館リウムを訪問した【写真9】。サムスングループ創立者の李秉喆氏、現サムスン会長である李健熙氏によって収集されたコレクションを展示するこの美術館では、様々な歴史的遺物と現代アートを織り交ぜた特徴的な展示が行われている。本調査の主たる目的は、リウム所蔵の「高句麗 景四年銘 金銅三尊仏光背」の銘文中、「共諸善知識那婁賤奴阿王阿踞五人，共造無量壽像一區」という部分に関して、供養人の人数が「五人」なのか「三人」なのかを確認することであった。従来は「五人」と釈読されていたが、それではその後に記されている供養人の名前と数が一致しない。「三人」であれば供養人は善知識である「那婁賤奴」「阿王」「阿踞」の三人となり、中国北方部出身の氏族である可能性がある。あいにく写真撮影はできなかったが、実際に銘文を確認したところはっきりと縦画が刻まれており、供養人の人数は「五人」であることが確認できた。

続いて、夢村土城址に向かった。漢城百済時代の王城の一つである夢村土城は、現在はオリンピック公園として整備されており、公園内には漢城百済博物館【写真 10】がある。全体的に子供向けの体験学習用の展示が多く、所謂「さわれる展示」が心がけられている。訪問当日も小学生がグループ学習に訪れたり、解説員が子供たちに展示解説をしている様子が見られた【写真 11】。



【写真 10】漢城百済博物館



【写真 11】七支刀について解説する解説員

また、「百済 昌王銘 石造舍利龕銘【写真 12】」が展示されていたので移録を行い、写真資料では確認できなかった龕の背面も確認することができた。更に、以前は韓国国立中央国立博物館所蔵であった「百済 金銅大香炉【写真 13】」もこちらに展示されていた。他に、「高句麗 延嘉七年銘 金銅仏光背【写真 14】」や「百済 鄭智遠銘 金銅三尊仏光背【写真 15】」の複製品なども展示されていた。



【写真 12】百済 昌王銘 石造舍利龕銘



【写真 13】百済 金銅大香炉



【写真 14】高句麗 延嘉七年銘 金銅仏光背(複製)



【写真 15】百済 鄭智遠銘 金銅三尊仏光背(複製)

『三国史記』巻 24 百済本紀 2 枕流王によると、374 年 9 月に東晋から胡僧 摩羅難陀がやって来たとされ、これが百済への仏教公伝であると理解されている。しかし、現在のソウルでは漢城百済時代の仏教関連遺物はほとんど発見されておらず、百済仏教が隆盛するのは 475 年の熊津（現在の忠清南道公州市）遷都、538 年の泗沘（現在の忠清南道扶餘郡）遷都以降であると考えられる。ただし漢城百済博物館は漢城百済時代に関する展示が中心となっているものの、上記のように百済仏教に関する展示も多かった。

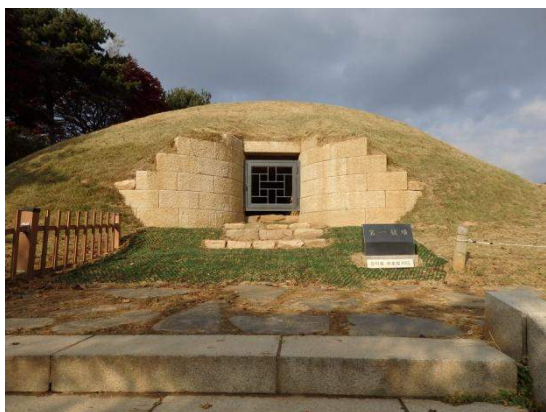
11 月 17 日には、高句麗鍛冶屋村に向かった。こちらはソウル特別市の東方に位置する九里市が運営する施設であり、2007 年に放映されたテレビドラマ「大王四神記」撮影のために作られたテーマパークである。高句麗鍛冶屋村がある峨嵋山は、475 年、高句麗が百済を攻撃した際に拠点とした要塞であり、百済蓋鹵王（在位 455～475）が高句麗軍に捕らえられて処刑された地とされる。この漢城陥落に際しては、高句麗が事前に「浮屠道琳」を間者として派遣して百済国内を攪乱したとされ、古代朝鮮において僧侶が間者として利用された様子が垣間見られる¹。

峨嵋山には高句麗堡壘群が現存し、高句麗関連の遺物も多く発見されており、その一部は高句麗鍛冶屋村にある展示室で展示されている【写真 16】。長らく工事休業中であつたが、11 月 17 日～12 月 1 日に一時開業す



【写真 16】高句麗鍛冶屋村 展示室

るということで見学に向かった。ガイドブックでは入場料が必要ということであったが、無料で見学することができた。高句麗関係の遺物が見学できた点はもちろんだが、峨嵋山と百済の王城である夢村土城・風納土城は漢江を挟んでほぼ対面しており、5世紀後半の高句麗・百済の緊迫した軍事状況を実感することができた。



【写真 17】ソウル芳夷洞古墳群 第 1 号墳

次にソウル芳夷洞古墳群に向かった【写真 17】。現在は古墳公園として整備されており、西側に第 1～3・6 号墳、東側に第 7～10 号墳が位置している。付属する展示施設などはないが、ボランティアの解説員に話を聞くことができた。そこで、第 4・5 号墳は漢江開発の際に破壊されたこと、西側の墳墓は東側墳墓より高地となっているので王ないしは王族の墳墓、東側墳墓は貴族墓と考えられること

と、江南地域には石村洞古墳群・可楽洞古墳群など百済古墳群が存在することなど様々な話を聞くことができた。また、石村洞古墳群は高句麗式の積石塚であるが、芳夷洞古墳群は土盛りの墳墓であるため、百済式の墳墓と考えられることなど、写真などを参照しながら解説して頂いた。高句麗の王都である国内城・平壤城周辺には積石に使用する岩が多いが、ソウルは漢江流域の平地であるため岩が少なく、積石塚を作ることが困難であったと考えられるという。本調査では、石村洞古墳群・可楽洞古墳群を訪れることができなかったが、今後訪問したい。

最後に奉恩寺を訪問した【写真 18】。現在、地下鉄の新駅「奉恩寺駅」を建設中のため、目前の大通りでは大規模な工事が行われている。訪れたのが夕方であったので法要などは終了していたが、それでも多くの人が訪れて熱心に祈りを捧げていた。



【写真 18】奉恩寺

11 月 18 日、仁川国際空港から帰国の途についた。

3. 調査を終えての所感

本調査の主要な目的は、朝鮮三国時代の金銅仏像の調査である。ソウル市内の博物館に所蔵されている朝鮮三国時代の金銅仏像を実見し、有銘・無銘に関わらず、両手に収まるほどの小型の金銅像が多いことを改めて確認した。小型金銅仏像は移動が容易であり、必ずしも発見地が作成場所とは限らない。実際、「高句麗 延嘉七年銘 金銅仏光背」は慶尚南道宜寧郡で発見されたが、銘文には「高麗國樂良東寺」の文字が確認できるため、実際は高句麗領内で作られたものであることが分かる。このように小型金銅仏像に関しては、発見地のみならず、銘文形式や仏像様式などから重層的に考察していく必要性を再確認できた。

また、小型金銅仏像について、佐藤智水氏は北朝では造像供養がまず他界した肉親の追善供養のために行われ、小型金銅像は家庭内で供養礼拝されたものであると指摘している²。村田靖子氏もまた、中国・日本の小型金銅像の多くは、個人的な念持仏であったと述べている³。現在発見されている朝鮮三国時代の金銅仏像もまた、ほとんどが小型金銅仏像であることから、寺院に安置して集団で祈りを捧げるというよりは、個人で携帯したり、家庭内で礼拝するために作られたと考えられる。これらの作例は有銘金銅仏像を見る限り、王・王族や貴族の発願によって作られたというよりは、それよりも下層の民衆によって作られたものと推察される。

一方、扶餘陵山里寺址で発見された「百済 昌王銘 石造舍利龕銘」や「百済 金銅大香炉」は、国王による造塔事業等と関連して作られたものである。これは、王や王族、貴族層を中心とする仏教信仰を示すものである。

以上の点から、朝鮮三国時代における仏教に関しては、王や貴族を中心とする国家主導の仏教や教団運営による寺院を中心とした仏教とは別に、個人による仏教信仰についても考慮する必要があることが分かる。こうした点に関しては、太陽信仰や始祖信仰など、朝鮮半島独自の信仰との関わりも想定しながら考察していくことが重要である。

近年の再開発によってソウル特別市は大きく様変わりし、博物館・美術館や史跡の整備が整っている。本調査で最も印象に残ったのは、大きな都市開発が進められる中、曹溪寺や奉恩寺においては大規模な法要が営まれ、多くの市民が熱心に礼拝していた様子である。韓国の人々の深い信仰心を感じることができ、現代的な仏教のあり方について見つめなおすことができた。

¹ 直木孝次郎「古代朝鮮における間諜について」『古代の動乱』直木孝次郎古代を語る 7, 吉川弘文館, 2009 年（初出 檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集』第 5, 1979 年）参照。

² 佐藤智水「北朝の造像銘」『北魏仏教史論考』岡山大学文学部研究叢書 15, 岡山大学文学部, 1998 年（初出「北朝造像銘考」『史学雑誌』86-10, 1977 年）参照。

³ 村田靖子『小金銅仏の魅力ー中国・韓半島・日本ー』（里文出版, 2004 年）参照。